

中国の気象事業のありかた (I)

—日中友好協会学術代表团に参加して—

神 山 恵 三*

1. はし が き

この度、みなさんのご推せんによりまして、日中友好協会の学術代表团の一員として、中国各方面の科学界を訪問しました。

どうして、この訪中が行われたかといいますと、次のようないきさつがあります。

朝鮮戦争が終って世界に平和的な気運がただよっていた頃、日本と中国との間にも、未だ政府間協定がなかったにもかかわらず、民間協定などによる、いわゆる積み上げ方式によって次第に友好的な雰囲気が高まってきました。ところが、岸政府となってから、急にこの友好的な雰囲気が冷え始めてきたのです。それは、岸政府が一かんして民間協定を認めず、これを保障しようとしないうで、中国を敵視する政策をとり続けてきて、ついに長崎において中国国旗を凌辱するという事件を引き起こしてしまいました。この事件を最後としてついに、せっかく今まで積みあげてきた日中両国の友好関係は切れてしまいました。

こうして、両国の間の関係はここ二、三年は殆んど交流はありませんでした。しかし、こうした両国の関係は決して望ましいものではありません。そこで、なんとかお互いに打開しようではないかという気運が再び盛りあがってきました。

われわれ、学術代表团の訪中も、この気運に呼応して計画され、実行されたものです。

団員は自然科学として、気象・地質・動物・物理・農業・社会科学として中国学（シノロジー）、経済学よりそれぞれ選ばれ、随員を含めて11名の構成でした。

昨年（1960年）11月26日羽田を出発し、香港を経て、広州、北京、南京、上海、杭州と廻わり、再び広州、香港を通して12月27日、ちょうど1カ月で帰ってきました。

会員ならび各官署の皆さんから物心両面のご援助を戴いたことを厚く御礼申し上げます。

さて、限られた紙面で、訪中の見聞を全部報告するこ

とはできませんので、とくに、気象に関係する部分について報告申し上げます。

2. 今までの日中気象交流

戦後の日中両国の気象交流はどうなっていたか、まずこの点をふりかえてみましょう。朝鮮戦争が終ってから次第に日中関係が好転して行ったように、気象界の交流もだんだん打開の方向に向っていきました。

この問題の最初は1953年5月5日、全国気象職員組合協議会第2回委員会の名において、中国気象学者あてに、中国側の気象資料は日本の気象災害防止にとって重要なので、ぜひ資料を放送してくれとの要請と中国が気象観測資料の国際放送やっていないことに対する中国側の意見を知らせてくれという意味のメッセージを送ったことに初まります。

中国が気象放送をしないわけはどうしてかという質問を出したことは朝鮮戦争は終っても、中国近海にはアメリカの第7艦隊は相変わらず遊泳しているという状態が変えられない以上、中国は自国を守るために気象資料を簡単に放送できないという中国側の事情に対する理解と同情が足りなかったことによるには違いありませんが、その当時のわれわれの素朴な気持からではありました。おそらく、中国側のいい分として、「われわれの立場も考えてくれ」といいたかったのではないのでしょうか。だから、同年10月20日の再度の要請にもかかわらず遂に中国側の意見なるものは得られなかったのです。

1954年学術会議の会員が10月1日の国慶節に中国を訪問したとき、和達長官もそれに同行しました。この訪問中に、彼はときの周恩来外交部長の接見を受けて、中国の気象資料の提供について考慮している旨の言明を得たのです。

翌55年3月10日中国気象局長涂長望氏はラジオを通じて、気象警報を放送し、東海附近に出漁中の日本漁船に對して、気象災害をこうむらないようにとの配慮をはらってくれました。その後、いくたびかそのような警報をしてくれました。

同年4月19日、全国気象職員組合協議会の中央執行委

* Keizo Kamiyama, 気象研究所応用気象研究部

員長は、中国の気象警報に対して感謝すると共に、ルーチン気象情報が得られるように、また責任ある交流機関が生まれるよう希望を涂長望氏あてに表明しました。

国際地球観測年が開かれる関係で、中国から8人の科学者が日本を訪問のため、1957年2月18日北京を出発しました。この中に、涂長望中国気象局長、趙九章地球物理研究所長も参加していました。

中国気象界の二人の要人の訪日によって、いっそう両国間の友好関係はもりあがってきました。とくに、この訪日によって、いままで待望していた、中国のルーチン気象資料が入ることになったのです。その年の末には続いて中国で使用しているラジオゾンデの種類やその観測所名などの資料も入手できるようになりました。これは、全く日本国民の要望に答えたことで、決して政府が努力したためではなかったのです。

これにつづいて、岸保、佐貫、毛利の各氏が中国気象界の招待を受けて訪中し、中国気象との密接な関係が益に深められるようになりました。

だが、せっかく、これまで盛りあがってきた友好関係は、さきに述べたような政治的理由によって急に退潮してしまいました。

昨年(1960年秋)に開かれた数値予報のシンポジウムに日本気象学会からも趙九章氏に招待状が出されましたが、逐いに中国側からの出席はありませんでした。

招待状に対する、趙九章氏の返辞は6月10日付けで送られてきましたが、それには大体次のようなことが書かれていました。すなわち、——招待状を戴いたこと感へ謝するが、日本政府は引きつづき中国敵視の政策を止めないし、二つの中国を作ろうとする陰謀をろうして、両国の国交の正常化をさまたげている。このような状況下では残念ながら会議に参加できない。会の盛会を祚る——。といった意味でした。

このような、中国の一見高姿勢と受けとれるいわゆる国交三原則については後に再びふれるとして、一つ指摘しておきたいことは、同じような返辞が物理学者周陪源教授からも、日本の素粒子論学者に対してもおくられ、進歩的な物理学者仲間の中で「周陪源書函」としてひじょうによく討論されておりました。

また例の安保斗争において、周陪源教授を中心とする中国の学者から、日本の学者、研究者に対して「アメリカ帝国主義と日本軍国主義に対して闘っている日本の学者、研究者を支持する」というメッセージが送られたこともありました。

以上のようなことが今回の訪中学術代表団が送られることになった一つの基盤になっていました。

要するに、今回の学術交流は単に中国の気象学や動物学がどうなっているのかということのみをみてるばかりでなく、もっと中国と日本の学者が現実の世界情勢の中でどうしたら正しい学術交流ができるのだろうか、そういった基本的な話し合いをしてこようというのが、その目的であったわけです。

3. 趙九章教授らとの話し合い

11月26日羽田を発って30日に北京に着きました。そして3日午後中国気象学会を訪問しました。なにしろ、われわれ代表団は自然科学から社会科学にわたっての混成旅団であったので、それぞれ中国での活動はみな要求が違っていましたなるべく団体行動をとうろうということで、それぞれの専門分野に分かれることを極力さけるようにしました。だから、思うように各分野で接触はできなかったました、その点で各団員の不満ももちろんありました。

12月3日、この日の午後は分散活動の時間で、各人はそれぞれの専門分野と接触するときでした。

ちょうど、その日は北京市の人民委員会の委員選挙の前日にあたっていて、わたくし達の話し合いの場所である人民文化宮は選挙の会場になっているので、翌日の準備に大わらわのようでした。紅や緑などたくさんの旗がすでに玄関にひらめいていました。

招じられて、入った部屋には趙九章氏を始め、気候学者の呂炯氏、杜行運氏、徐明氏、方齊氏、肖更海氏といった中国気象学会の幹部が座っておりました。

北京の街は凍てついた寒気がおおっていましたが、人民文化宮の中は日中両国の友好を祝するかのようによ暖かさでみちておりました。

わたくしはまず、中国科学院がわれわれを招待してくれたことの感謝をのべ、続いて、10月18日付けで日本気象学会理事長名で送った「日中気象学界の学術交流に関する中国気象界に対する要望書」を討論してもらったことを感謝しました。というのは3月1日対外文化協会の招待のとき、隣りに座った方齊氏より「要望書」は壁新聞(大字報)にのせられ、みんなで討論しているということを知っていたからです。中国側では、本当によく、討論してくれたようです。だが、「梅雨や台風等の問題について、例えば機関誌上において討論したい」というような交流の具体的な問題の処理については、われわれと問題意識がだいぶ違っているようでした。

わたくしは更に日本の気象事業が新安保条約の付属協定である地位協定によって基本的に性格づけられていること、しかし、U-2型機に対する気象学会会員有志による反対声明を行ったり原水爆実験禁止に卒先して反対声明を出したり、あるいは、気象業務にたずさわる人々の大部分が全国気象職員組合の一員として、生活を守り、新安保条約阻止に立ちあがったことなどを通じて、平和と独立と民主主義を守る闘いをつづけていることを伝えました。

方斉氏が解放後の中国気象学会について説明し、日本気象会からの要望にふれたあと、趙九章氏は温厚な話し振りで次のような発言をされました。

「正野先生からの手紙は日中両国の交流を促進させるためのものであり、このような問題に日本の気象関係者が関心を心を持っていることは理解できる。しかし池田政府は岸内閣の敵視政策を続け、日中交流の個人的往来に不便を作っている。このため今の状況のもとでは学術の交流と個人的往来は不便であるが忍ばなければならない。

日本気象学会の行った原水爆禁止声明U-2型に対する反対声明は新聞で知り、日本の同業者が正義の行動をとっていることに大きな支持を与えたい。

1954年に和達先生が中国を訪問されたとき日本国民の要望にこたえ周総理はわが国の気象資料を手渡した。周総理はこのような資料が日本の気象に大いに役立つと同時に、反動的当局に予報の正確さを要求されている和達先生を大いに助け、アメリカ帝国主義に奉仕することをも知っていた。科学は政治と切りはなしで考えるわけにはいかないのである。わが国のこの正しい行動は日本の多くの人々から支持されている。

こうした友好的な雰囲気の中で国際地球観測年の関係で中国から8人が貴国を訪れ、また貴国からも3人の工作者を招いた。このように中国共産党と政府と気象工作者は両国の文化、科学の交流をはかるため一連の努力をしてきた。しかるに岸政府は両国の友好的交流を不可能にするような一連の政策をとり、池田政府もそれと変りがない。しかも新安保条約に日本の気象業務がアメリカ帝国主義に奉仕することが盛られていることも忘れることができない。

日本の気象工作者の進歩的な人々が自由をかちとり生活を守る闘いをしていることは非常に正しい。私たちも共通な立場に立っている。正野理事長とは常に文通を交わしているが、最近の両国の文化と科学の交流

を發展させる手紙についてはまだ常任理事の中で検討していないが基本的な見方は先に述べた通りである。神山先生が学術代表団としてはるばるわが国を訪れ、両国の学術交流について真剣に討議できたのは誠にうれしい。先生を送った貴国の気象工作者によりしく伝えていただきたい。」

人民文化宮の中でのわたくしたの話し合いはなかなか終りそうにもありませんでした。趙九章教授はいくたびか、スケジュールのつまったわたくしのいそがしい体と時間のおそくなるのを気にして、あついで心でいたわってくれました。

辞して帰るとき、外はいっそう凍りつくような寒さでした。

4. 中国の気象事業のありかた

方斉氏、呂炳氏が説明された中国気象学会のあり方、および農業気象の状態あるいは、その後地理研究所や気象局で話合ったこと、あるいはまた南京大学気象系、広州の中山大学等での話合い、またその他各方面で得た資料などを通じて中国気象事業の基本的なあり方についてまとめると次のようにいえると思います。

1) 気象業務は生産に直結しなければならない

昨年1960年3月10日から4月10日の1カ月にわたって北京で第2期全国人民代表大会が開かれましたが、国家計画主任國務院副総理李富春氏は1960年度の国民経済計画草案についての報告の中で、農業政策について次のよ

「1960年には農業、水利、林業および気象部門の事業費として19億4000万元で1959年の56%増し、基本建設費投資額は39億1000万元で1959年の62.9%増しになる…」

このような予算の急増は国家がいかに気象に対して要求し、期待しているのが大きいかを物語っているといえましょう。

1959年の12月に上海で全国気象工作者会議および全国気象学会工作者会議が開かれました。この大会で各地における気象工作の経験交流を進める中で、従来気象学が理論のための理論に走る欠陥があったのを徹底的に批判し合い、気象業務が生産に直結しなければならないことを決定しました。

しかし、ここで生産に直結するということとはどういうことなのでしょう。すぐ役立つと意味を強調すれば単なる実用主義におちいってしまいます。また逆になんらかの形で生産に結びつくといえればそれはどんなことでも理くつはつくというものです。また、「生産に直結」を

強調する余り基礎的なことがおろそかになる危険はないものだろうか……。こんな疑問は当然起ってくるものです。中国科学院での話合いのときも、この点がわれわれの関心の中心でした。彼等はおこいのです。

「もちろん、理論研究を重視するが、理論は実際と結合しなければならない。自然科学、技術はとくにそうであるが現実の必要、現実の材料から放れることはできない。理論とは仮設である。しかし、この仮設がなければ科学の前進はありえない。実せんを通じて仮設が作られ、その仮設は実せんの方法を与え、あたらしい事実を発見する。

実せんから出発するということは大衆の生産経済に注意を払うことである」というのです。

さて、気象学が生産と直結するようとの配慮は、「四結合、両過関」というスローガンによって表わせられます。

四結合とは、「農民経験、歴史資料、天気予報、実況観測」とが結合しあうことを表わし、両過関とは「哨組補充訂正関、実地観測使用関」の二つの関門を通るという意味です。

哨、組とは後で説明しますが人民公社の気象哨、生産隊の気象組のことで、必ずこの生産現場で気象情報はこの二つの関門を通らなければならないことが示されています。

このようにいうと、気象学の理論的問題はおきざりにされるようなことはないかという疑問は当然おこります。しかし、このような問題は決して無視されたわけではありません、それを説明するには次のことをいえば充分かと思えます。

前に述べた1959年中国の気象業務についての大討論会が上海で開かれたのに続いた、北京ではソ連の学者を交えて大気大循環に関する討論会が行われました。

以上のような理由で中国気象ではいま農業気象学が最も重要視されています。

2) 中国農業気象

解放以前の中国では農業気象学などはほとんど白紙状態でした。反動政府支配下では全く軽視されていました、また欧米から学んできた学者達は実際的な問題を軽視する傾向があって、このような問題は正常の発展が期待できなかったのです。

しかし、中国農民には数千年来の経験がつみ重ねられていました、解放後農民達の積極性が高まって農業気象学上の具体的な問題が全国的に提起されてきました。

1958年以来の生産の「大躍進」は必然的に農業気象の大躍進を促がしました。

最近、農業気象上の総括として次の6つがまとめられました。すなわち

(1) 作物生理に対して

ある種の作物はいかなる温度、水分を必要とするか地理区、時期別の種まき最適期の決定、気象と作物成長の各段階の状況とを合せ考えるための「平行観測」の実施、そしてこれらの研究を通じて冬まき小麦、綿花、水稻、大豆について生育期の有効積算温度、最多収穫期の温度指標の決定などがそれでありました。

(2) 農業気象観測方法について

土壌水分計、農業蒸発計、農地小気候観測法の整備およびこれらの系統的な研究を充実しました。

(3) 農業技術措置に対する農業気象の効果を導入したこと

それには、農業生産の発展の要求を充すために検定処置を行ったこと、冬期灌水、防風垣、早春における表層の耕作、地表の土おさえ、地下水分の保持、その他、農作物の合理的な密植を行うための条件の発見等々がこれに続いて研究されました。

(4) 農業災害気象の調査

降霜の条件の研究、地下水分を保持するための土壌水分の研究、降雪、山林火災の調査、それらに続いて

(5) 農業気象予報について

農業生産が高度に集団化され、計画されなければならぬというせまった要求を充すために、小麦、水稻、綿花、油菜等の播種期開花、および収穫期の予報をして合理的な農業活動を助けなければならぬ任務を果たさなければとされています。

(6) 農業気候の調査

各地区の農業気候の特長を知り、人民の経験を掘りおこすことなどが今後として期待されています。つい最近のアジア通信にもチベットに10個の気象站（県ブロックの気象機関を「站」といわれている）ができたが、ここではチベットの産業に合うように羊の生育や種付けに最も都合のよい時期の判定などを行うことがこれらの気象站の任務とされていることが報告されていました。

(7) 人工降雨、降雪制御の実施

1959年から60年にかけての大かんばつあるいは逆に水害で中国の農業生産は大きな損害を受けました。中国の発表によれば全国の耕作面積6000万ヘクタールの中の2000万ヘクタールは被害をうけました。

このためか、人工降雨術などの実験が大々的に各地域行われました。大規模なものは主として上海気象台が中心になって行ったようでした。(直接に上海気象台を訪問する機会がなかった)

農民と協力して、いわゆる「土砲」を上空に打ちあげて種まきを行ったり、ドライアイスを飛行機からまいたりする方法がとられました。ここでも、重要なことは農民との協力が充分に行われながらそれが遂行されたということであると思います。

この他、気象の重要な任務として、中国の大自然改造計画に気象が一役かっていることです。

この自然改造計画の一つはいわゆる「南水北調」の計画です。チベット高原から雲南にかけては年間2784km²の雨量があります。ところが北ではあまり雨量はありません。そのため長江と黄河の水の比は3:1の割になっております。このような南の多い水を北の少ない方へ送るという計画がこの南水北調です。長江の水をその上流域の金沙江、雅砻江などから引き込み運河で黄河に連絡させるというもので、この運河は4万kmにもおよぶ大計画です。

また、新疆省地区では氷河地帯の氷をとかし、この地区一帯を緑地化しようという計画があります。推定蔵氷量1兆m³という氷河の量の氷があるのでこれが進展したらあの辺りの気候も一変してくるのではないのでしょうか、こうした目もくらむような研究に気象学者、技術者は積極的に参加しているのです。

3) 中国気象事業の特色

中国の気象事業は生産と直結するように、学問の方向が向けられていることは既にのべました。では、このような任務を遂行するために中国気象事業はどんな特色を持っているのでしょうか。

中国は社会主義建設のために「総路線、大躍進、人民公社」という三つの大方針をうちだしています。

気象事業の中にもこの方針が貫かれております。よく「二本の足であるく」ということを中国では使います。従来からあった方法で行う土法と西欧の近代文化を基礎にした洋法で行う洋法、この二つを同時に発展させること、これが「二本の足であるく」ということに相当します。

中国気象事業も「二本の足」で歩いているのです。

中国の気象組織は北京に中央気象局があり、省には省気象局、その下部組織として専区気象局があり、県には県気象局があります。これが行政組織における気象組

織です。

ところが、ひじょうに特色あることは、社会組織である人民公社にそれぞれ気象哨、人民公社の下部機関である生産隊にそれぞれ気象組があることです。なるほど、わが国にも区内観測所はあります、そして、大きさといひ観測の規模といひ区内観測所とそんなには違わないでしょう。しかし、その果たす役目はひじょうに違います。

気象哨、気象組は「四自」によってできます。「四自」とは自願(自分達の願ひ)、自建(自分達で建設する)、自用(自分達で作ったものを自分達で作る)、自管(自分達で管理する)をさします。そしてその任務とするところは「予報補充の八字措置」といわれているものです。八字とは聴、看、諺、地、商、用、管をさしています。

聴とは中央気象局、省気象局等の国家機関より出された予報をよくきくこと。

看とは、地域地域で風、雲、気象光学現象、動、植物の生態をよく観察すること。

資とは各地域での気象要素をそれぞれ図表化しそれをいつでも参考できるような態勢にしておくこと。

諺とは各地域で伝わっている天気俚言などを集収整理しておくこと、

商とは大衆と相談すること。

用とは予報できたものを実際に応用すること。

管とは技術面で総括し点検し技術の絶えざる向上をはかること。

「四結合両過関」「四自」「予報補充の八字措置」…といった具合に、中国では文字の国といわれているだけあってなかなか面白いスローガンをかかげるものです。しかし人によっては何んだ、あたり前のことを業々しくいうのではないかという人もあるかも知れません。しかし、北京の人民文化宮の一室で地球物理研究所長が中国の気象について語るときも、南京の大学の気象学系の一学生が気象について語るときも同じような熱っぽさで、これら「四結合両過関」「四自」「予報補充の八字措置」の言葉が彼らの口からほとばしりてくるのです。これは驚くべきことです。一枚岩のようにながしりと結ばれあっているのだなということをつくづく感じました。

話が少し、それでしたが、以上のべたように、行政組織としての気象組織は「四結合両過関」というスローガンで、また「四自」という意気込みで建設された社会組織としての気象組織は「予報補充の八字措置」というスローガンをかかげて両者がびったりと協力し合うという

わけです。

この相互作用によってどんな効果がもたらされたでしょうか。

農民は近代気象学を学ぶことによって「作物はお天とう様まかせ」という気持を克服できるようになり、また、洋法にもとづく近代気象学は数千年来中国の農民が実践によって各地で得られ気象経験を吸いあげることができるようになったのです。このようにして現在やく 500 万 (1958年) の人々が気象に関する一定の知識水準に達しました。

中国農民の古い経験にもとづく学問、技術と近代の学問、技術とを同時に発達させる、いわゆる二本の足でゆく方法はすべての分野で「総路線」の方向に沿って進められていますが気象においてもそれが具現しているということです。

もう一つの特色は躍進のスピードが早いことです。数値をかかげましょう。

気象局、気象駅の発展ぶりをみますと

年度	1949	50	51	52	53	54	55	56	57	58
気象局	5	18	19	34	43	55	67	99	110	230
気象站	96	140	172	283	314	456	648	1278	1537	2525

(「国家统计局編：偉大な10年、'60年 北京」による)
となっていて、気象事業に従事する幹部の数は

年 度	1949	1952	1957	1958
%	100	629	2701	2952

(中国農業展覧会、気象館にて)

その躍進ぶりはすばらしい速さです。

この他農業気象哨についていえば1957年 505 カ所であったものが1958年には1342、また土壌水分の測定箇所が1957年では260地点であったのが'58年では556と急激に増加しています。

この傾向はどこまでのびるのでしょうか、もちろん、開放当時は北京にもバスが6台しか動いていなかった状態から始まったといわれているくらいですから、スピードが早いといってもやがて頭打ちが来るに決まないと考えるのは当然の常識かも知れません。

だが、連続して生産の大躍進が行われ、生産速度ばかりでなく加速度も限りなく増大していくというのが社会主義社会の発展の方則であることを考えると必ずや気象事業も極く近い将来に目を見張るような躍進が行われることと思います。もちろん躍進の形は、気象局や気象站の数が増加するというにかぎられるわけではありません

せん。質的な高まりが急騰するであろうと思います。

4) 中国の気象教育

ここで、中国の気象教育についてふれておきましょう。

気象学の専門教育は各大学の気象系と気象局に属する気象養成所で行われています。気象系是北京、南京海上等各大都市の総合大学にあります。気象養成所は現在までのところ北京と成都にあります。

一例として南京大学の気象系について申し上げます。

この気象系は1930年頃は地理系の中の気象組として発足したのに始まります。解放まではほとんど見るべき発展はなかったのですが、解放後は急に学生教師の数が増加しました。どこの大学や研究でもそうであるように、1952年より中国の社会主義革命の総路線を發展させ、政治、文化、教育、経済の革命を深めるために、院系調整が行われました。この期間において、日本におけるような教授を中心とする学門体系を改め、ソ連、東欧諸国での経験を学び、中国の新しい現実と、それとを結びつけたのです。

国家の緊急な要請をみたすためにこの院系調整が行われました、そして2年制の気象専修科をもうけたり、また逆に4年制を1年延長して5年制に切り変えたりしました。

訪れた南京大学気象系には700人近くの学生と60人余りの教師がいます。特別に南京大学だけが気象系が多いわけではないので、学生700人、教師60人という数は一般大学における値なので、全国の気象系における数を全部加えたらばえらい数になります。

まず学生は何らかの形で労働に参加しなければならないことになっています。たとえば、直接ある一定期間だけ人民公社などに出かけ、そして農労働にたずさわったり、あるいは気象哨の設立に手を貸したり、農民の中で行われている天気俚言を集めたり、予報補充の役目を果たしたという自分の専門分野での働きします。

学科は2年間は共通の学科、たとえば数学300時間、物理150時間その他、気象学、天気予報基礎、気候学基礎、流体力学、熱力学等の基礎学科を学習し、3年目から気象専業と気候専業に分かれ、気象専業では物理数学、気象観測、天文学、中期天気予報、大気環境、数値予報、気象局におけるおよび野外における二つの生産実習を行い、気候事業では物理気象、気象観測、気候学、小気候、農業気象、区域気候(世界気候、本国気候)気象局に

おけるものと野外における気候分析の生産実習、このほか、外国語は露英、政治経済は全学共通となっています。

中国では学問をするものは「紅専家」になるためだとよくいわれます。「紅専家」とは赤い専門家すなわちマルクス・レーニン主義に徹した専門の学問、技術の高い人をさします。単んに学問、技術の水準が高いだけではなく自然弁証法、史的唯物論、経済理論をよく身につけてそしてなによりも人民に奉仕し、中国の社会主義革命に献身する戦斗的な教養ある人士にならなければならないというわけです。

わたくしが、大学生が卒業して辺境地区へいくような場合物質的な補償とかあるいは辺境地区でも文献がたくさんあって勉強でき易い条件は国家で配慮してあげているのかという質問を広州の中山大学の気候学の教授との話し合いのときに出しましたが彼は言下に、確信にみちてこう答えました。

「いまの気象の学生は気象観測の白地点をなくそうという国家要請を自己の情熱としてもっている。西藏、新疆省のような辺境地区へいきたいと願っている。もちろん、そこには多くの困難はある。しかし、今日は克服できなくても明日は克服できるという見通しを持っている。研究するにはたしかに文献は少ない。しかし、実際の中に「文献」は存在している。その土地での特殊な問題はなんの文献にもないので彼はその研究の第一者となるわけである。あるとき、雲南省の南部で熱帯植物を発展させようという要求があった。そしてそこに気象観測所を作った。そこでの工作員の研究は第一級の研究であった。「文献」は現実にあったのだ。

物質的配慮についてはとくに辺境地区の人がよいということを知らない。ただわれわれの物質的関心はそこにはない、われわれの生活は補償されているし、子供の教

育には国家の配慮がある。」

以上は気象の高等教育であります。一般大衆に対する気象教育についても一言ふれておきましょう。

わたくしが中国地理研究所で生気候に関して講演を行ったあと、気象学会の人に中国気象学会の会員は何人ぐらいいますかと質問したところ、「さあ3,40万ぐらいいるか」という答を得ておどろいてしまいました。このことは中国の大衆とくに農民が急速に気象に関する知識を習得し一つあることのしようことと思います。もちろん、日本の気象学会とは質的に違っているわけです。

北京の農業展覧会の一部には気象館という一つの大きな建物があります。ここには気象事業の説明、中国気象のありかた、人工降雨や自然改造における気象の役割あるいは各地での農民の独創的な農業気象学上の発明、工夫などが集められ展示されています。気象館の外にはわが気象庁のそれよりも立派な露場もありました。そして、北京見物にきた農民達でしょうか、その人達が一心になってノートしているのがわれわれの目につきました。このように、大衆への気象教育の普及は大きな努力が払われているようでした。

各人民公社の気象哨も気象にはずい分力を入れているようでした。

最近の「人民文学」という中国の文学雑誌に李淮という人の書いた『雲耕記』という小説が大いへん問題になり多くの人に読まれたようでした。これは人民公社につとめるある気象哨の工作員の話で、始めはなんにも知らなかったものは勉強して気象工作員になっていく過程が大いへん感動深く書かれているそうです。この小説が多くの人に読まれているということ自体にわたくしは気象の大衆化が地についているを表わしているのではないかなと思ってみました。



学術代表团と陳毅副総理と会見
(向って右より5人目筆者、
8人目陳毅副総理)